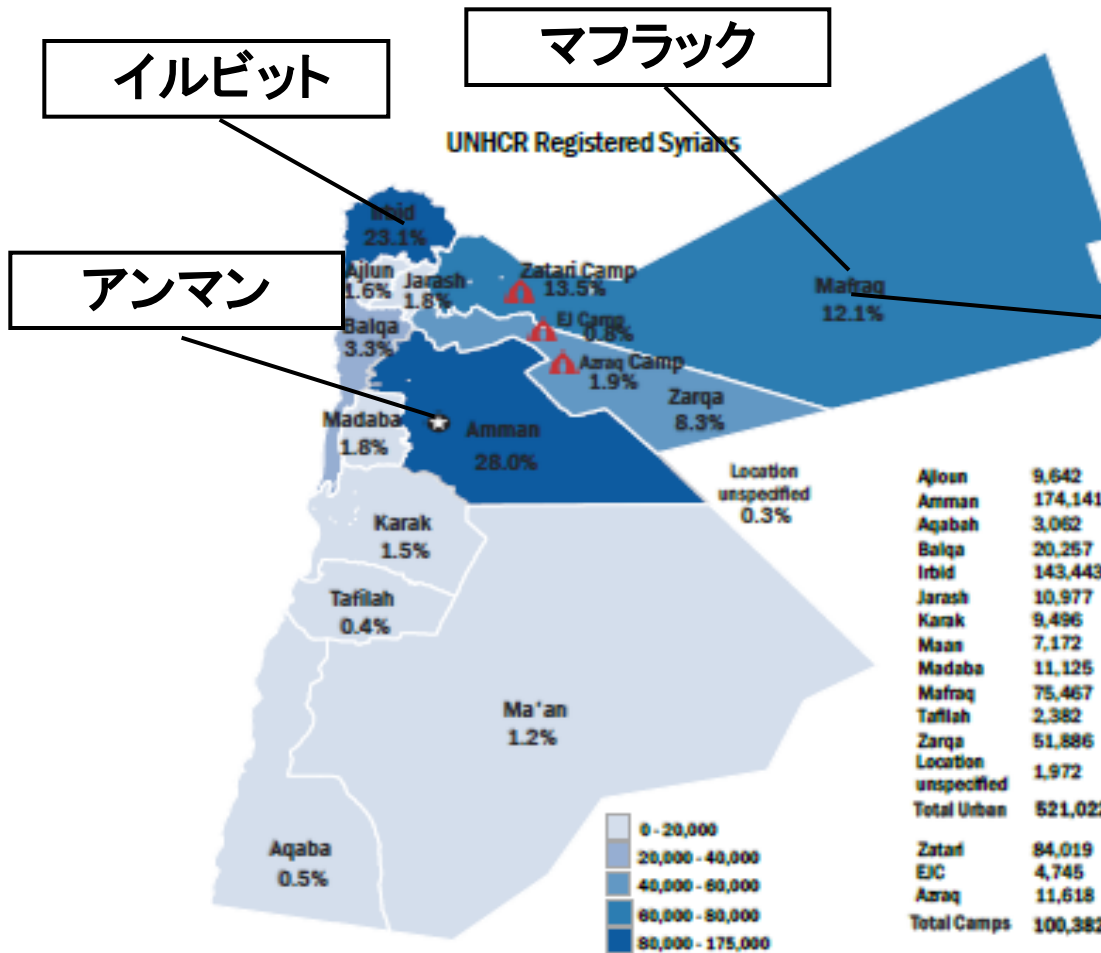




ヨルダンに暮らすシリア難民の子どもたち

加藤 香子
認定NPO法人 国境なき子どもたち (KnK)

2015年6月19日



ザアタリ難民キャンプ



- * シリア難民の約8割がホストコミュニティに居住
- * ヨルダン教育省は、シリア人を公立校へ無償で受け入れ(二部制校 98校)

- ✓ シリアとヨルダン、カリキュラムの違い
- ✓ 空白の学習期間
⇒学力の低下

- ✓ 登下校時の危険、学校でのいじめ・暴力
⇒ヨルダン人とシリア人との間の軋轢の高まり

- ✓ 一教室における膨大な生徒数
- ✓ 授業時間の短縮（50分から35分へ）
- ✓ 二部制校増加による教員不足
⇒教育の質の低下、今後の更なる負荷

- ◆ 避難、劣悪な生活環境、複雑な家庭環境、過去のトラウマを抱える子どもたちに対し、緊急時においても保障されるべき教育を受ける権利を確保
- ◆ 受入れ国ヨルダンの負担を軽減、体制強化を通じ、教育の質の向上

① 学校教育の補充
(ザアタリ難民キャンプ)

② 補習授業の提供
(ホストコミュニティ)

③ 教育省への体制支援
教員研修の実施

①活動と成果（学校教育の補充）

- 公立中学校の時間割を補充する作文・音楽・演劇の授業指導
- 基礎学力（例 アラビア語）の向上
- 授業を通して発言・発表し、自尊心を高める





[成果] 2015年3月～5月時点
-抽出した460名の生徒のうち8割の
アラビア語能力が向上

②活動と成果（補習授業の提供）

- 公立中学校における補習授業（アラビア語、数学、英語）の指導
- 基礎学力を強化することで、学習の遅れの回復
- ヨルダン人とシリア人が机を並べ、共に課外活動に参加し、相互理解を促進





シリア人、ヨルダン人共に課外活動に参加



家庭訪問を通し、継続した通学を促す

[成果] 2014年3月～2015年2月時点
-二部制13校のシリア人およびヨルダ
ン人生徒のうち84%に習熟度の伸び

③活動と成果（教育省への体制強化支援）

- 緊急時の教育で用いられる指導案の策定
- 授業の質の向上を目指す教員研修の実施



[成果] 2014年3月～2015年2月時点
-研修を受けた教師52名のうち、87%
が研修内容が実際の授業で有効であつ
たと回答

- 5年生（11歳）のシリア人の男の子
- 姉二人、障害を持つ兄一人、下に三人の弟の7人兄弟。家族が生きていくため、次女は15歳で結婚、嫌がる長女も無理やり結婚させられようとしたが、補習授業スタッフが父親と話をし、可能な限り、学校に通わせるよう説得。
- そんな複雑な家庭環境の中、クラスメートとの喧嘩や授業妨害、問題行動を起こすことで大人の関心を引こうとしていたNaifくん。

スタッフが、彼を排除するのではなく、彼に先生の補助役を依頼したところ、自分の存在を認められていることを実感、態度が変わり、授業にも落ち着いて参加するようになった。



Naifくん (中央)



- 8年生（14歳）のシリア人の女の子
- 父親は内戦で亡くなり、母親と5人兄弟と共に、歩いて国境を逃げ、Mugherに住む。母親は病気でほとんど病院におり、Emanさんが長女として兄弟の面倒や家事の一手を担う。
- 補習授業に参加し始めた頃は、いつも一人で孤立し、誰とも関わろうとしなかったEmanさん。心ここにあらず、悲しそうな顔で思い詰めている様子もよく見られていたが、約1年間の補習授業を通し、ヨルダン人、シリア人いづれの生徒とも次第に話をするようになり、休み時間は一緒に遊び、他の子どもと変わらない学校生活を送れるようになった。

Emanさん（最後部）

- シリア人とヨルダン人の子どもたちがさらに友情を深め、融和する
- “難民”としてではなく、一個人としての尊厳が保護・維持される

そのためには、

- 疲弊する受入れ国及びコミュニティへの更なる支援
- 緊急支援から開発支援への切れ目のない移行



- 家族と共に、安心・安全に暮らしたいという願いを持つこと
- 難民問題をじぶんごととしてとらえる
～「友情のレポーター」を通じて

